

時たま引いたかと思ふと書棚の奥に惡臭を放つて斃れてゐたりして、死んでも崇る。何でこんなものが存在せしめられねばならぬのかと、つくづく恨めしくなる。ゴリ／＼、ゴリ／＼、あの音を聞くと、晝でも夜でも神經が昂ぶつて迫もぢつとして居れない。シッと鋭い氣音を發してみたり、疊を叩いてみたり、シコを踏んでみたりするのだが、もとより效果は瞬間ですぐまた始める。つひには棒切れなどでこゝと思ふあたりを突きまくつてやつと退散したらしい氣配でホツとするのである。

横の書棚の上に、この數日來一個の壺をのせてあるが、これにも鼠に對する深い遺恨がまつはつてゐる。この壺は契丹藝術の名殘として、一般に鷄冠壺の名で通つてゐるものゝ一つで、扁平の革袋に七八分の飲料を入れてぶら下げた時の形を模した陶器である。表裏兩面とも洞文を四つ目に淺く陰刻した上を、見事な綠青の一色に焼き上げ、側面は地肌のまゝに殘してある。色にも形にも漂ふ素朴な北人趣味に、淺からぬ愛着を覺えるのであるが、別に特に賞玩に値するのは、その綺麗な綠青の面のあちこちに、恰も地色として焼きつけたかのやうにギラ／＼と底光りのする鮮やかな銀色が浮かんでゐて言ひやうもない高雅の趣を添へてゐる點である。それは波斯の黝銀色の陶器などの系統に屬するものではなく、壺が土中に埋もれてあつた間に、綠青が酸化作用を受けて、かうした色を呈することになつたものらしく、もとより契丹陶工の工夫に成つたものではない。いつもやうに次の間の床の上にこの壺を飾つておいた三四年前の一夜、鼠がその部屋にはいつてゐるといふ娘の注進に、スワとばかり有り合せの塵拂を、オツトリ刀の恰好で遂に取り上げ、襖や障子を内から締め切つて、一擊の下に日頃の恨を晴らしてやらうと勇み立つた。てっきり欄間の額の裏に潜んでゐるものと狙をつけて、軽く持ち上げてゆすぶると、果してナゲシ